

科学研究費助成事業「新学術領域研究（研究領域提案型）」 研究概要
〔令和5年度事後評価用〕

令和5年6月30日現在

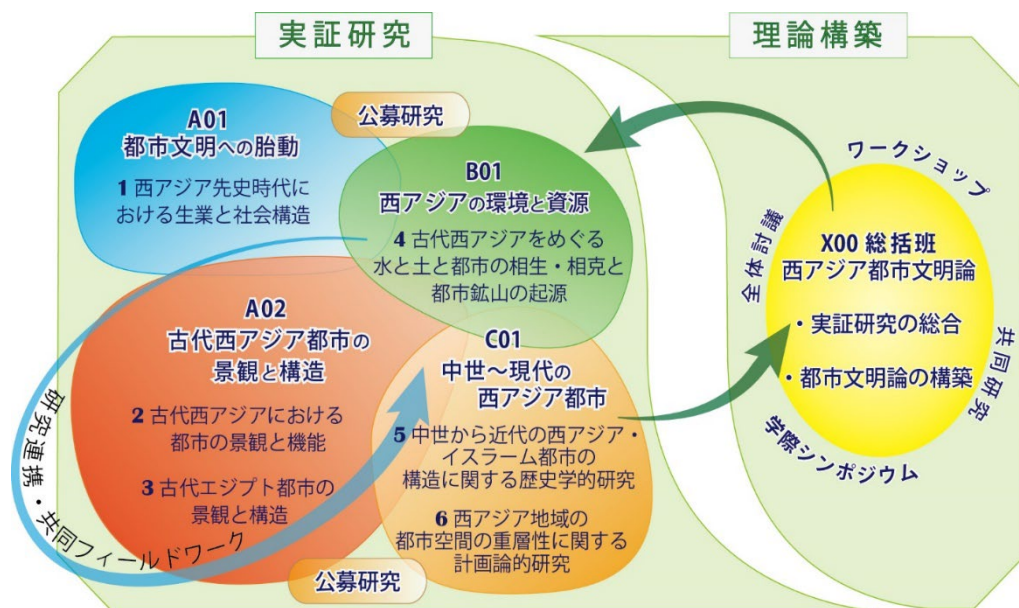
機関番号：12101
 領域設定期間：平成30年度～令和4年度
 領域番号：5001
 研究領域名（和文）都市文明の本質：古代西アジアにおける都市の発生と変容の学際研究
 研究領域名（英文）The Essence of Urban Civilization: An Interdisciplinary Study of the Origin and Transformation of Ancient West Asian Cities
 領域代表者
 山田 重郎 (Yamada Shigeo)
 筑波大学・人文社会系・教授
 研究者番号：30323223
 交付決定額（領域設定期間全体）：（直接経費）592,500,000円

研究成果の概要

古代西アジアでは、人類史上初めて都市型社会が生まれ、都市を中心に地域の在り方が決定づけられる社会構造が広域に形成された。西アジアの都市遺構は、豊富な考古学的資料と保存性の高い媒体（粘土板）に書かれた多くの文字史料によって、都市文明の発生とその古代における変容に関して、大量のデータを提供する。本領域研究は、人類の都市との関わり方の原点であり、都市をめぐる濃密な歴史的経験である古代西アジア都市の諸相について、その発生のプロセス、景観と社会的機能の変遷と多様性、環境との相互影響関係を、考古学、文献学、自然科学の学際的連携によって解明すべく活動した。さらに「都市とは何か」という命題を、西アジアの隣接地域ならびに後代の西アジア都市の諸相も射程に収めて考察することで、古代西アジア都市の個性を浮き彫りにし、その後代への影響を明らかにすると同時に、現代の都市主導型文明のサステナブルな将来に向けて有用な文明論を提示することを目指した。

西アジアにおける都市の諸相を学際的方法で、通時的・共時的に研究するために、A01「都市文明への胎動」、A02「古代西アジア都市の景観と構造」、B01「西アジアの環境と資源」、C01「中世～現代の西アジア都市」の4つの研究項目を設定、これらの研究項目を総括班「西アジア都市文明論（X00）」がハブとなって統括し、すべての研究項目が協働して、古代西アジア都市文明の特徴と後代への影響を歴史的・社会的・文化論的に評価し、都市・人間社会・環境の相互関係、都市の類型、といった問題を総合的に検討した。

こうした活動を通して、古代から現代まであまたある都市を構成する建築学的・社会的要素を比較格子のなかに捉え、その多様な形態とその背景となる自然・歴史・政治・宗教・社会との関係を理解し、都市の生成・変容・没落のパターンを把握することが、「都市の本質」を理解するということにほかならないことを明示した。



研究分野：考古学、楔形文字学、エジプト学、西アジア史、都市研究、文化地質学

キーワード：都市研究、古代西アジア、古代エジプト、環境資源、考古学、文献学

1. 研究開始当初の背景

西アジアは、農耕、牧畜、冶金、文字記録、一神教、そして都市文明といった人類史に大きな影響を与えた文化的革新が地球上で最も早く生じた地域であり、西欧世界の思想的源流であるユダヤ・キリスト教文化の故地でもある。そのため、19世紀以来、多くの考古学的調査が行われ、イラク、イラン、シリア、トルコ、パレスチナを中心に何百もの都市遺跡が調査された。これらの考古学的発見を通し、各地で都市の景観と機能が明らかにされてきた。

前3200年ごろの南メソポタミアに成立した都市ウルクでは、粘土板に文字を記す技術が行政運営のために発明された。その後、この書字技術は、楔形文字システムとして洗練されながら西アジア各地に伝播し、複数の言語の記述に応用された。この結果、前3千年紀から紀元前後の時代に至るまでの長期間、古代世界において出色の文字文明が西アジアにおいて繁栄した。書字技術は、多様な目的に用いられるようになり、人間社会の様相が種々の文書に記録された。

古代西アジアは、都市主導型の文明が地球上で最も早く高度に発達した地域であり、豊富な考古学的資料と保存性の高い媒体（粘土板）に書かれた多くの文字史料によって、都市文明の発生とその変容に関する大量のデータを提供する。人類の都市との関わりの原点であり、人類史上最古の都市文明をめぐる濃密な歴史的経験であった古代西アジア都市の諸相の解明は、都市の本質を問うために決定的な価値がある。古代西アジア都市を、民主的なギリシア都市に対する専制的オリエント都市とみる西欧の古典的・傾向的理解は批判されて久しい。しかし、西アジアにおける都市の発生と変容、都市の環境や人間社会との相互影響関係、都市景観の様相、都市の諸機能を種々の史資料に照らして実証的に解明し、現代に至るまでの都市のタイポロジーに照らして歴史的に評価する試みは、都市型社会の理解に向けた意義深い課題としてほぼ手つかずに残っていた。

2. 研究の目的

本領域は、異なる学問分野がそれぞれの分野内に孤立しては獲得できない広い視野に立って、学際的に協働することで、古代西アジア都市という大きなテーマに臨み、そこに都市文明の本質を考究する実証研究と理論研究を実践する。具体的には、西アジア都市文明の発生・拡散・変容の歴史的プロセス、ならびに都市の景観と機能の多様性を、地域的な広がりや踏まえながら分析し、古代から現在までの西アジア都市の在り方を通時的・共時的に俯瞰する。同時に、長年にわたる都市化の歴史において、都市文明が地球環境にどのような影響を及ぼし、また、どのような社会観やイデオロギーの変化を人間社会にもたらしたのかを考察し、長い歴史を通して累積された都市文明の姿に照らして現代の都市文明の在り方を省察する。

3. 研究の方法

本領域研究では、まず**考古学**が重要な役割を担う。19世紀以来、西アジア各地の都市遺跡で発掘調査が行われたが、当初は神殿・宮殿などの大規模建築物、権力者の残した見栄えのするモニュメント、文字史料に調査が限定されていた。しかし、調査地域が広がり、調査方法が精密化するに伴い、調査対象も、市民セクターを含む都市構造、都市の周辺に広がる村落の分布、都市に関連する水利設備や交易路、家畜の放牧・遊牧と関連する痕跡などといった「都市景観」に及んだ。現在では、都市をトータルに分析する研究原理としての考古学の重要性はますます高まっている。

考古学と連動し、都市で営まれた人間社会の諸相の研究に大きく寄与する学問分野が**文献学**である。先述の通り、南メソポタミアで前3200年頃に発明された書字技術は、現在のイラク、シリア、トルコ、イラン、レバノン、パレスチナ、エジプトなどを含む地域に伝播し、各地の都市遺跡からは、粘土板や石碑にシュメル語、アッカド語、エラム語、ヒッタイト語、ウガルイト語、古代ペルシア語などで書かれた大量の楔形文字文書が発見されている。多岐にわたる豊富な文書史料は、王権や神殿を中心とした政治と行政、農耕・牧畜・手工業・交易のような産業、法と社会制度、建築・数学・天文学などの科学、宗教と儀礼、文学と思想といった多くの分野についての情報を含み、都市とその周辺で営まれた人間社会の諸相に関する豊富なデータを提供する。こうした楔形文字文書群に加え、前1千年紀の半ば以降に西アジアで広く通用したアラム語をはじめとする西セム系言語、さらにはギリシア語によって石材、オストラカ、パピルス、羊皮紙などに書かれた諸文書（書簡、行政文書、記念碑文など）もまた、西アジア都市に関するデータを含んでいる。

考古学と文献学に加え、都市を取り巻く環境、資源、ならびに農業・工業・交易等の産業の分析には、**自然科学**分野の参画が不可欠である。具体的には、都市遺跡に由来する動植物の遺存体を同位体分析などによって分析し、食生活や農耕・牧畜の動植物学的な詳細を解明すること、都市内部やその周辺に見られる鉱物・石材・土壌（粘土板やレンガの素材）・水を採取して化学組成を調べ、都市に供給された金属・石材・河川堆積物の起源とそうした資源環境の地理的広がりを把握すること、衛星画像を用いて灌漑・農業用水の取水システムの変化を追跡し、都市への水の供給システムの変遷を探ること、地震や災害の都市への影響を地球科学的な分析によって評価することなど、都市と環境・資源の関係についての重要な問題が扱われる。

こうした考古学・文献学・自然科学の学際的連携によって、都市文明の諸要素が芽生えた先史

時代の複雑社会を背景に、都市が誕生して変容を重ねていく前 3000 年頃からヘレニズム・ローマ期に至るまでの 3000 年におよぶ期間に、都市空間はどのように構成され、そこでどのような社会が営まれ、いかなる思想が生まれたのか、都市とその周辺の村落や遊牧社会はどのような関係にあり、都市と都市はどのようなネットワークで結ばれたのか、都市文明は周辺の環境にどのような影響を与え、環境は都市の在り方をどのように規定したのか、といった問題を通時的・共時的に明らかにすることが本領域研究の課題である。

「都市とは何か」という大きな命題を古代西アジアという都市文明の古層に探る本領域の目的は、西アジアの隣接地域の都市、ならびに後代の西アジア都市をもある程度射程におさめ、古代西アジア都市の特徴を相対的に評価することによって補完される。これにより、古代西アジアの都市文明の個性を浮き彫りにし、その後代への影響を考察すると同時に、現代人に忘却された西アジア都市文明という歴史的経験を再発見して、都市文明と人間社会の関係を深く広く探求し、現代の都市主導型文明を内省的に再考して、サステナブルな未来をもたらすための都市文明論を提示することが、追及すべき到達点である。本領域研究は、西アジアと隣接する古代エジプトの都市研究と中世から現代に至るまでの西アジア都市を研究する複数の計画研究を含む。葬祭装置の発達が顕著で、かつては「都市なき文明」と呼ばれ、城壁都市の欠如が強調された古代エジプトだが、近年は、都市型居住地の形成と都市化の詳細が積極的に研究され始めた。また、中世以降の西アジア都市は、古代の都市プランを継承しつつ、イスラーム都市、近代都市として変容を遂げた。こうした研究分野をカバーするエジプト学、イスラーム学、西アジア史学、社会人類学、都市計画学、都市社会学、文化遺産学等の研究者が本領域に参画する。

こうして、本領域は、異なる学問分野が学際的に協働することで、古代西アジア都市というテーマに臨み、そこに都市文明の本質を考究する実証研究と理論研究を実践する。

4. 研究の成果

本領域研究の特徴は「都市とは何か」という問題を、地球上最も早く都市文明が生まれ発展した西アジア地域に焦点をあて、先史時代から現在までをカバーする長射程で、超領域的視点から複眼的に考察することにある。「都市とは何か」という問いへの答えは、考古学、建築学、社会学、歴史学といった一分野の観点から特定の都市・地域・時代をモデルに「都市」の定義を試みることは解決され得ない。定義付けという行為は、分野優先的・ドグマ的な性格を持っており、分野や研究者ごとに異なる定義が提案される。様々な定義は、都市の特徴を一局面において端的に言い当てるが、都市という現象の一面を捉えているに過ぎず、「都市の本質」を必ずしも十分に説明しない。本領域研究によって行われた多分野協働による長射程の都市研究は、こうした課題を克服し「都市文明の本質」に迫るおそらく唯一の方法であると思われる。本領域研究は、古代から現代まであまたある都市を構成する建築学的・社会的要素を比較格子のなかに捉え、その多様な形態とその背景となる自然・歴史・政治・宗教・社会との関係を理解し、都市の生成・変容・没落のパターンを把握することが、「都市の本質」を理解するというところにほかならないことを明示した。歴史的に連続する容態として西アジアに追跡される「都市の本質」は、本領域研究において諸分野で実施された多くの個別研究で分析され、学際的・分野横断的研究会やシンポジウムを通して論じられた。それは、おおよそ以下のように要約される。

(1)【複雑社会から都市へ】 紀元前 3500~3200 年ころ周囲の村落の人口を吸収してメソポタミア南部で誕生した人類最古の都市ウルクでは、多様な職業や社会階層の人々が、祭祀を共通の精神的支柱として集住し、複雑社会を管理する行政と情報管理手段としての書字技術を発達させ、都市民の生命と財を守る城壁を設けて都市を形成した。さらに、我々の領域研究の長射程では、都市に先行する複雑社会の発生もまた研究された。紀元前 1 万年前後、南東アナトリアやメソポタミア北部の農業社会誕生以前の狩猟採集社会において、集落中に公共建築物を造営する集落構造や、集落から独立した大規模な祭祀施設の建設が確認される。このことは、祖先礼拝や何らかの神格を中心に集合する精神的エネルギーが、集落や集落ネットワークの形成に果たした役割の重要性を示唆する。こうした様態が、その後の南メソポタミアでの都市の成立にどの程度の直接・間接の影響を与えたかを論じるにはなお「失われた環」を埋める新データの発見が必要である。それでもなお、南メソポタミアにおいても最古期の都市遺構の層の下には、以前の時代から神殿と見なし得る祭祀施設が建設されていたことを考慮すると、K. Wittfogel が提唱した灌漑農業のための労働力集中の要請が中央政権と都市を生んだという学説に反して、宗教儀礼が都市形成に果たした役割の重要性が示唆される。

(2)【都市の多様化と変容】 神殿構築物を中心に市域が広がり、行政組織によって都市とその周辺の住民が統合され、都市域を城壁が取り巻いて防備する典型的メソポタミア都市のプランは、平坦な沖積平野の河川沿いに築かれ、神殿が都市の中央権力として行財政の中心であった南メソポタミアの伝統的神殿都市においては、その後も長期にわたり維持された。しかし西アジア各地においては、異なる地理的・政治的・社会的環境において、都市プランや建築学的特徴においても、政治的・社会的役割においても、様々な特徴を持つ都市が建設されていった。都市は時代の変遷と共に変容し、あるものは破壊されたり、放棄されたが、シリアのアレッポやダマスカス、イラク・クルディスタンのエルビルのように、前 3~2 千年紀から現在まで途切れることな

く変容を重ねながら生存している都市もある。都市の歴史の変容には、大きな中央権力を持つ領域国家の出現・盛衰や行政経済ネットワークの発達・変化が大きな影響を与え、変わりゆく地理的・歴史的環境の中、宗教文化的・政治的・経済的機能と重要性、面積と人口密度の大小、人口構成要素・言語・文化とその多様性、交通ネットワーク上の位置、経済的重要性などの要因によって様々な性格・形状・規模の都市が形成された。そして、変化する環境とともに、都市の伝統的古層を内部に包含しつつ新しい建築学的特徴が上塗りされて、重層的な都市景観が形成されていった。したがって、都市とその遺構は、その都市が生まれ変容していった歴史と文化を重層的に包含する歴史の鏡であり、都市景観は時代をリードした都市を核とする政治・経済・社会・文化を反映して形成されたことが、多くの具体的事例を通して確認された。その成果を、5巻一組の英語の論集 *Cities in West Asia and North Africa through the Ages*, 5 vols. を 2024–2025 年に Brepols Publisher から公刊する準備も完了した。

5. 主な発表論文・出版物（二重下線：計画研究代表、下線：分担者）

（研究項目 A01）

- Tsuneki, A./Watanabe, N./Anma, R./Jammo, S./Saitoh, Y./Saber, S.A., “Preliminary Report of the Charmo (Jarmo) Prehistoric Investigations, 2022,” *Al-Rāfidān* 46 (2023), 1–34.
- Kondo, O./Tashiro, M./Miyake, Y., “Human skeletal remains from Hasankeyf Höyük, a sedentary hunter-gatherer site in southeast Anatolia,” *Anthropological Science* 130 (2022), 121–134.
- Maeda, O., “Stone Balls from Salat Cami Yanı and Hasankeyf Höyük, Neolithic Sites on the Upper Tigris,” in: S. Nakamura et al. (eds.), *Decades in Deserts*, Tokyo, 2019, 261–268.
- Itahashi Y./Miyake, Y. et al. “Amino Acid 15N Analysis Reveals Change in the Importance of Freshwater Resources between the Hunter-gatherer and Farmer in the Neolithic Upper Tigris,” *American Journal of Physical Anthropology* 168 (2019), 676–686.

（研究項目 A02）

- Garcia-Ventura, A./Karahashi, F., “Socio-Economic Aspects and Agency of Female Maš-da-ri-a Contributors in Presargonic Lagash,” in: N. Brisch/F. Karahashi (eds.), *Women and Religion in the Ancient Near East and Asia*, Boston/Berlin, 2023, 25–44.
- Hogue, T., “For God, King, and Country: Cult and Territoriality in the Iron Age Levant,” *Levant* 54/3 (2022), 347–358.
- 春田晴郎「西アジアの古代都市」『岩波講座 世界歴史 3』岩波書店, 2021, 163–184.
- Shibata, D./Yamada, S. (eds.), *Calendars and Festivals in Mesopotamia in the Third and Second Millennia BC*, Studia Chaburensia 9, Wiesbaden, 2021, 254pp.
- Konstantopoulos, G., “The Bitter Sea and the Waters of Death: the Sea as a Conceptual Border in Mesopotamia,” *Journal of Ancient Civilizations* 35 (2020), 171–198.
- Nishiyama, S., “Provincial control in the eastern reaches of the Assyrian Empire,” *Studia Chaburensia* 8, Wiesbaden, 2020, 45–72.
- Yamada, S., “Names of Walls, Gates, and Palatial Structures of Assyrian Royal Cities: Contents, Styles, and Ideology,” *Orient* 55 (2020), 87–104.
- Yamada, S., “Neo-Assyrian Trading Posts on the East Mediterranean Coast and “Ionians”: An Aspect of Assyro-Greek Contact,” in: I. Nakata et al. (eds.) *Prince of the Orient: Ancient Near Eastern Studies in Memory of H. I. H. Prince Takahito Mikasa*, Tokyo, 2019, 221–235.
- Yamada, S., “*sal(a)hum* in the Old Babylonian Letters and the Urban Landscape of Upper Mesopotamia” in: P. Abrahami et al. (eds.), *Sur l’art, sur l’histoire et sur la vie, FS O. Rouault*, Oxford, 2019, 38–49.
- Mitsuma, Y., “The Relationship between Greco-Macedonian Citizens and the ‘Council of Elders’ in the Arsacid Period: New Evidence from Astronomical Diary BM 35269 + 35347 + 35358,” in: J. Haubold et al. (eds.), *Keeping Watch in Babylon: The Astronomical Diaries in Context*, Leiden, 2019, 294–306.
- 長谷川奏「ナイルの水辺に息づいた古代世界—文明の重層性に対するアプローチ—」東日本国際大学紀要『研究東洋』13 (2023), 81–93.
- 矢澤健/米山由夏/石崎野々花「古代エジプト中王国時代のセトルメント・パターンと砂漠の道」『西アジア考古学』23 (2022), 19–34.
- Hasegawa, S./Nishimoto, S., “Recovering the landscape of the waterfront at Lake Idku: Archaeological survey at Kom el-Diba” in: A. Wahby/P. Wilson (eds.), *The Delta Survey Workshop: Proceedings from Conferences held in Alexandria (2017) and Mansoura (2019)*, London, 2022, 55–64.
- Suto, Y., “Social Resilience and Organization of Knowledge in Ptolemaic Egypt,” in: Y. Suto (ed.) *Transmission and Organization of Knowledge in the Ancient Mediterranean World*, Phoibos Verlag 2021, 187–198.
- Kondo, J./Yoshimura, S./Kawai, N./Takahashi, K./Fukuda, R., “Preliminary Report on the Thirteenth Season of the Work at al-Khokha Area in the Theban Necropolis by the Waseda University Egyptian Expedition,” *Journal of Egyptian Studies* 27 (2021), 3–17.
- Wang, J./Friedman, R./Baba, M., “Predynastic beer production, distribution, and consumption at

- Hierakonpolis, Egypt,” *Journal of Anthropological Archaeology* 64 (2021), 101347–101347.
- 内田杉彦「新王国時代の文字資料にみられる「居住地」の呼称について」『都市文明の本質：古代西アジアにおける都市の発生と変容の学際研究2』2020, 145–150.
- 西本真一「マルカタ都市王宮における景観と構造」『都市文明の本質：古代西アジアにおける都市の発生と変容の学際研究2』2020, 157–159.
- 近藤二郎「古代エジプトの祝祭都市テーベの景観と構造」『都市文明の本質：古代西アジアにおける都市の発生と変容の学際研究1』2019, 107–112.

(研究項目 B01)

- 安間了/申基澈/渡辺千香子/辻彰洋/佐野貴司/齋藤有/中野孝教/横尾頼子/小泉龍人/Altaweel M./Marsh A./Hama Hashim/Rasheed Kamal/Jotheri Jaafar「スレマニ博物館所蔵の楔形文書粘土板胎土の化学組成」『都市文明の本質4：研究成果報告2022年度』2023, 147–152.
- Kurosawa, M./Semmoto, M./Shibata, T., “Mineralogical characterization of early Bronze Age pottery from the Svilengrad–Brantiite site, southeastern Bulgaria,” *Minerals* 12 (2022), 79.
- 黒澤正紀/池端慶/安間了/西山伸一「ヤシン・テベ遺跡の石室内の金属濃集堆積物の分析」『都市文明の本質3：研究成果報告2020年度』2021, 205–215.
- Sepahi, A.A./Ghoreishvandi, H./Maanijou, M./Maruoka, T./Vahidpour, H., “Geochemical description and sulfur isotope data for Shahrak intrusive body and related Fe-mineralization (east Takab), northwest Iran,” *Island Arc* 29 (2020), e12367.
- 黒澤正紀/池端慶/荒川洋二「古代西アジアにおける金属利用と都市鉱山の起源に関する基礎的検討」『都市文明の本質2：研究成果報告2019年度』2020, 173–180.
- Tsuneki, A./Rasheed, K./Watanabe, N./Anma, R./Tatsumi, Y./Minami, M., “Landscape and Early Farming at Neolithic Sites in Slemani, Iraqi Kurdistan: A Case Study of Jarmo and Qalat Said Ahmadian,” *Paleorient* 2 (2019), 33–51.
- Shitaoka, Y./Noguchi, A./Mallah, Q.H./Veesar, G.M./Shaikh, N./Kondo, H., “Optically Stimulated Luminescence Dating of Dune Sand Sediments in the Western Margin of the Thar Desert at Sindh, Southern Pakistan,” 『都市文明の本質1：研究成果報告2018年度』2019, 155–160.
- 浅原良浩/南雅代/ラズーリ・ハディ/アジジ・ホセイ「西アジアの古環境復元に向けて：イラン北西部ザグロス山脈に分布する石灰質化学沈殿岩の現地調査報告」『都市文明の本質1：研究成果報告2018年度』2019, 143–148.

(研究項目 C01)

- Morikawa, T. (ed.), *Acta Asiatica (Bulletin of the Institute of Eastern Culture)* No. 123 <Special Issue: Armenian Merchants and Their Communities in Early Modern Eurasia>, The Tōhō Gakkai, Tokyo, 2022.
- Yamaguchi, A., “The Kurdish Frontier under the Safavids,” in: R. Matthee (ed.), *The Safavid World*, London, 2022, 556–571.
- 守川知子(編)『都市からひもとく西アジア：歴史・社会・文化』勉誠出版, 2021.
- Fukami, N., “Regional Diversity and Sustainability of Megacities in Global Historical Perspective,” *Living in the Megacity: Towards Sustainable Urban Environments*, Springer, 2021, 67–104.
- Inaba, M., “The Narratives on the Bāmiyān Buddhist Remains in the Islamic Period,” in: B. Auer/I. Strauch (eds.), *Encountering Buddhism and Islam in Premodern Central and South Asia*, Berlin, 2019, 75–96.
- Matsubara, K., “Some learnings Gyoji Banshoya acquired from the spatial composition of the ancient shantytown of Mahieddine, in 1950's Algiers: Research on dwelling practice around the “bidonville (shantytown)” project in Algiers during the Late Colonial Period,” *Japan Architectural Review* 4, 2021.
- Alkazei, A./Matsubara, K., “Post-conflict reconstruction and the decline of urban vitality in Downtown Beirut,” *International Planning Studies* 26 (2020), 267–285.
- Taniguchi, Y./Iba, C./Koizumi, K./Temur, H./Yalçinkaya, U./Açıkgöz, F./Gulyaz, M., “Scientific Research for Conservation of Rock Hewn Church, Üzümlü (Cappadocia) in 2016: Chapel of Niketas the Stylitist in Red Valley,” *36. Araştırma Sonuçları Toplantısı 3. Cilt 40th International Symposium of Excavations, Surveys and Archaeometry 07-11 May 2019, Çanakkale*, 2019, 529–550.
- 三田村哲哉「仏領におけるユルバニスムの萌芽と興隆：西アジア都市の位置づけ」『兵庫県立大学環境人間学部研究報告』22 (2020), 67–79.

領域ホームページ (<http://rcwasia.hass.tsukuba.ac.jp/city/index.html>) :

「都市文明の本質：古代西アジアにおける都市の発生と変容の学際研究」(各年度の研究会・シンポジウム・研究会 [2018年度に19回、2019年度に29回、2020年度に24回、] のプログラム、ならびに研究論文・ノートを掲載)

領域年次報告書 :

山田重郎編『科研費新学術領域研究 都市文明の本質：古代西アジアにおける都市の発生と変容の学際研究1–5：研究成果報告2018–2022年度 (2019–2023; 各全232頁, 302頁, 346頁, 322頁, 306頁)